

博物館だより

No.210

令和6年5月1日

みやこ町歴史民俗博物館発行 福岡県京都郡みやこ町豊津 1122-13 TEL 0930-33-4666 FAX 0930-33-4667

博物館休館日カレンダー

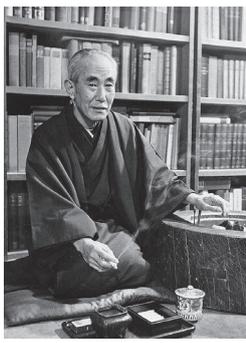
2024年5月

Calendar table for May 2024 with days of the week and dates.

休館日 ※情報はR6.4.18現在

◆博物館「イチオシ」逸品レポート この展示（&収蔵資料）「ココが見どころ、ココがツボ!!」

今年「みやこの先人」の一人、小宮豊隆の生誕140年の記念年です。漱石作品「三四郎」のモデルにして漱石研究の大家とされる小宮ですが、漱石という稀代の文豪の輝きが強すぎて、残念ながら彼自身のことあまりよく知られていません。



▲小宮豊隆 (1884~1966)

この記念の年、「知の巨人」ともいふべき教養の人・小宮豊隆を当館注目の資料から調べてみませんか？

●資料解説〜小宮家のファミリーヒストリー

小宮豊隆の先祖は、代々小笠原氏に仕えた武士で、その発祥は長野県松本市郊外にある旧小宮村と伝えています。現在もその地名が残ると共に、表記は異なるものの産土神として「古宮」神社があり、小宮家のルーツはここにあるとされてきました。

小笠原氏が信濃国（現長野県）守護に任じられた12世紀以降これに臣従し、同氏が小倉藩主に封ぜられた際は共に九州へ下り、幕末の動乱まで、小倉城下の新屋敷に居を構えて城勤めをしたと伝えています。

「伝えていきます」とするのはそのことを明確に記録した史料に乏しいため「動乱に加え、当主が二代続



▲小宮家で「御絵様」として伝えられてきた肖像画幅 右が豊隆祖父「治部蔵」 左が祖母「ツチ」

●資料名

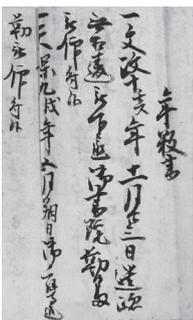
- 小宮豊隆資料（追加分）一括のうち ①小宮治部蔵（みやじぶぞう）夫妻肖像画幅 ②小宮治部蔵書長（とよなが）年数書

●データファイル

- 法量等：①二幅対 ②一冊5丁 制作年代：19世紀頃か ポイント：あまり知られていなかった小宮家の歴史に関する情報 公開状況：整理中のため通常非公開

けての養子だったため私自身も先祖のことはよく知らない」と小宮本人が著書等で語るように、小宮家のルーツに関する情報は、やや心許無いものがあります。

ただ近年寄贈された資料から、小宮の祖父の勤続年数調書に当たる史料や、祖父夫妻の肖像画が見つかるなど、小宮家の先祖が永年にわたり小笠原氏の下級官吏として、実直に勤務していた様子が分かってきました。



▲小宮治部蔵年数書 41年にわたる勤続が記録されている

◆講座・教室・催し物ガイド 5月の歴史講座

- 漢詩紀行講座 5月4日（土） 9時30分〜 5月11日（土） 10時〜 5月18日（土） 9時30分〜 5月25日（土） 13時30分〜

◆春の民俗芸能・行事シーズン到来！

「梁・山笠・神楽・奉納」公開情報 コロナ禍も漸く落着いてきたこの春、町内各所で以下の民俗芸能・行事が奉納・公開の再開を予定しています。コロナを乗り越えた喜びも加わって奉納・公開される伝統文化の力強い姿をじっくりとご覧になってみませんか。

●横瀬神楽（豊前神楽）

- 2日（木）19時30分〜 於：上末井公民館（犀川木井馬場） 3日（金）19時30分〜 於：横瀬公民館（犀川横瀬）

●「生立八幡神社山笠」行事

- 11日（土）行山 15時頃〜 12日（日）戻山 15時頃〜 於：神社周辺（犀川生立）

※時間はおよその目安です。天候や主催者都合で予告なく変更となる場合があります。 ※公開中止や終り分は紹介していません。



▲昨年の山笠の奉納・公開の様子

3月の業務日誌から

3月15日（金）から3日間、九州大学を中心とする調査チームが小宮豊隆資料の調査に訪れました。小宮が収集した和漢籍や洋書のほか、膨大な書簡を点検することで、大正期教養主義の担い手の具体像を追跡・確認できたとのことです。

3月29日（金）、みやこ町郷土史研究会から「郷土誌みやこ」第18号を頂戴しました。毎年会員の熱心な調査・研究成果が収められる本書ですが、今年も内容盛り沢山です。当館でも販売取扱していますので、ぜひお手に取って下さい。



▲マンガ「吉田兄弟物語」の活用成果報告も掲載されています



▲調査には東北大学・東京大学の研究者も参加されました

みやこの歴史発見伝 167 紫式部とみやこ町

「官兵衛ブーム」から10年

大河ドラマ「軍師官兵衛」の放送をきっかけに、黒田官兵衛ゆかりの史跡が所在する、みやこ町から大分県中津市に及ぶ豊前地方一帯で沸いた「官兵衛ブーム」から今年で10年を迎えます。みやこ町では、官兵衛が築いた「馬ヶ岳城跡」に、多くの観光客や研究者が訪れ、また城跡が町の文化財に指定されるなど、この町の文化財の重要性を再認識する機会となりました。今年の大河ドラマ「光る君へ」の主人公は「現存する世界最古の長編小説」である「源氏物語」を書いた紫式部です。千年の時を超えて読み継がれているこの物語は、原稿用紙に換算すると約2500枚に及ぶ大作ですが、行橋市出身の「末松謙澄」はイギリスのケンブリッジ大学に留学中の明治15年（1882）に、この源氏物語を英訳し、世界に向けて紹介した人物として知られています。みやこ町勝山上田出身で「日本製麻業の父」と称された吉田健作は末松謙澄と一緒に、漢学者の村上弘山が開いた私塾「水哉園」で学んだ同窓生です。今回は、紫式部とみやこ町の意外な関係について紹介します。

豊津に赴任した式部の祖父

紫式部の出生年代については、様々な説がみられますが、平安時代中期



紫式部の祖父や義父が赴任した豊前国府の跡（みやこ町国作）

の天元元年（978）誕生という説が有力視されています。彼女が誕生した当時、日本は66の国に分かれていました。それぞれの国には、現在の都道府県庁にあたる「国庁」が置かれますが、この国庁が位置する「県庁所在地」が「国府」です。各国の国庁では、現在の都道府県知事にあたる「国司」が統治していました。この国司の最上位である「受領」の多くは、都から派遣された役人で、地方では非常に強い権限を有していました。「源氏物語」にも数多くの受領が登場しますが、紫式部の父、藤原為時は、越前国（主に福井県）や越後国（主に新潟県）の受領を務めた人物で、式部の夫である藤原宜孝も山城国（京都府南部）などの受領を務めています。みやこ町国作にある「豊前国府跡」は、現在の北九州市から大分県宇佐市までの範囲に及ぶ「豊前国」の行政を統括する国庁の跡です。他の国と同様に、

豊前国府にも都から赴任した歴代の国司の記録がみられますが、この中に紫式部の祖父「藤原雅正」や式部の夫、宜孝の父「藤原為輔」の名を確認することができません。現在まで段階的に実施された豊前国府跡の発掘調査では、雅正や為輔が赴任していた平安時代中期頃の遺構も検出され、土器など多数の遺物が出土しています。これらの中には紫式部の祖父や義父が使用したものが含まれているかもしれせん。

式部の夫もみやこ町に？

紫式部が誕生する約200年前の奈良時代、疱瘡（天然痘）が国内に蔓延し150万人以上が亡くなったとされています。みやこ町国分にある「豊前国分寺」をはじめ、全国の国分寺は、この疫病を仏教の力によって鎮める目的で建立されたものです。長徳4年（998）7月には、再び、疱瘡が国内に蔓延し、多数の死者が出た記録が残されています。この年、紫式部は、藤原宜孝という人物と結婚しています。藤原宜孝は正暦元年（990）8月30日に筑前国（現在の福岡県西部地域）の受領に任じられ、また併せて正暦3年（992）9月20日には、九州の統括機関であった大宰府の役人の次官「大宰少式」にも任命されています。当時の記録によると藤原宜孝と紫式部は、親子ほどの年齢差であったとみられています。長保元年（999）頃宜孝との間に賢子が誕生しますが、この年の11月に宜孝は「宇佐奉幣使」に任命され、現在の大分県宇佐市に



平安時代の男女の装束

の受領を務めた人物という説もあり、もしかしらば豊前国府の受領であったのかもしれない。

「受領の娘」の活躍

式部の曾祖父である藤原兼輔は、平安時代の和歌の名人36人（三十六歌仙）の一人で、祖父の雅正は兼輔とともに「土佐日記」の著者である「紀貫之」と親交があり、親密な交流を伺わせる和歌が残されています。紀貫之も三十六歌仙の一人で延長8年（930）から承平4年（934）にかけて土佐国の受領として赴任しており、「日本最古の日記文学」である「土佐日記」は任期を終えて土佐から京に戻る貫之ら二行の55日間の旅路の話を綴ったものです。また紫式部をはじめ、歌人の和泉式部の父、大江雅致は越前国、清少納言の父、清原元輔は肥後国（現在の熊本県）の受領を務めるなど、この時代を代表する文学作家や歌人が、いずれも「受領の娘」であることは注目されます。世界最古の女流文学「源氏物語」誕生の背景には曾祖父から式部まで代々受け継がれた文人の家系が影響していることが伺えます。紫式部の祖父や義父が赴任し、夫も訪れたと推察される豊前国府ですが、今回、新たな歴史的评价を追加することができました。この豊前の地に「京都」の郡名があることなど、紫式部に夫の宜孝がみやこ町をはじめとした豊前国の「土産話」をしたことは想像に難くなく、新婚間もない二人の会話を弾ませるきっかけになったことでしょう。（井上信隆）